

アダム・スミスの自然価格論について(上)

——生産価格論の学史的考察——

岡 崎 栄 松

はじめに

〔I〕〔II〕

A・スミスの狭義の自然価格論

一 スミスの自然価格・市場価格論

二 投下労働説と支配労働説

三 分解価値説と構成価値説(以上、本号所載)

四 第一の「自然価格」概念の意味内容

〔III〕

A・スミスの広義の自然価格論

一 スミスの賃金・利潤論

二 第二の「自然価格」概念とその理論的意義

三 スミス地代論(一)

四 スミス地代論(二)

〔IV〕

問題の総括

〔I〕 はじめに

マルクスは、『資本論』第三卷(第二篇第十章「市場価格と市場価値」)のなかで、生産価格について次のように述べている。——「生産価格は平均利潤を含んでいる。われわれはこれに生産価格という名を与えたが、それは、アダム・スミスが自然価格(natural price)と呼び、リカードウが生産価格(price of production)または生産費(cost of production)と呼び、重農学派が必要価格(prix necessaire)と呼んでいるもの——といっても彼らのうちには生産価格と価値との区別を説明した者はなかった——と事実上同じものである。なぜなら生産価格は、長い期間について見れば、供給の条件であり、それぞれの特殊な生産部面の商品の再生産の条件だからである」(Das Kapital, Bd. III, K. Marx-F. Engels Werke, Bd. 25, Dietz Verlag, Berlin, 1972, S. 208. 『資本論』第三卷『マルクスのエンゲルス全集』^②a, 大月書店, 二四九頁)。

マルクスのこの文章を一見したところでは、アダム・スミス、リカードウおよび重農学派は、諸商品の長期的な「供給の条件」としての生産価格を問題にしながらも生産価格と価値とを同一視した点で、いずれも、まったく共通していたかに思われる。だからまた、たとえばスミスの「自然価格」概念とリカードウの「生産費」・「生産価格」概念とのあいだには、なんの相違も見られないようにも思われる。しかし実際には、スミス『国富論』に説かれている「自然価格」そのものが一義的ではなく、二つの異なる概念内容をもっているのであって、この点ではマルクスが『剰余価値学説史』(とくに第二分冊の第十章「費用価格にかんするリカードウとA・スミスの理論(反論)」

および同分冊の第十四章「A・スミスの地代論」において詳しく論じているところである。そしてリカードウについていえば、彼は、スミスのそうした二重的な「自然価格」概念のうちの一方を継承しながら、みずからの独自の自然価格論——あるいは「生産費」・「生産価格」論——を展開したのであった。

したがって、マルクス生産価格論の学史的前提をなす古典派の自然価格論の研究にさいしては、われわれはまず、アダム・スミスの「自然価格」概念を立ち入って検討しなければならぬ。いいかえれば、生産価格論の学史的考察のためには、スミス自然価格論に含まれる二重の「自然価格」概念がどこで、どのような形で展開されているか、また彼の第一・第二の「自然価格」概念はそれぞれどのような意味内容ないし理論的意義をもっているかが、まずもって明らかにされねばならない。

ところで、アダム・スミスが『国富論』のなかで特別な章をたてて「自然価格」を論じているのは、第一篇第七章——それは「諸商品の自然価格と市場価格について」という標題をもっている——においてである。しかしスミスは、同篇の第八～十一章（第八章「労働の賃金について」、第九章「資財の利潤について」、第十章「労働と資財のさまざまな用途における賃金と利潤について」、第十一章「土地の地代について」）での所論を、第七章における自然価格論の延長線上で展開しているのであって、この意味では彼の自然価格論は第七～十一章の全体をつうじて論述されているといつてよい。^(注)そこでわれわれは、第一篇第七章における自然価格・市場価格論を「A・スミスの狭義の自然価格論」と呼び、これを次章Ⅱで取り扱うことにする。他方、われわれは同篇第八～十一章での賃金・利潤・地代論を「A・スミスの広義の自然価格論」と呼んで本稿Ⅲにおいて考察する。なお、ここでやや先回りしていっておけば、アダム・スミスの第一の「自然価格」概念、すなわち△平均賃金＋平均利潤＋平均地代√を

意味する「自然価格」概念が説かれているのは第七章および後続の第八〜十章においてであり、また彼のもう一つの「自然価格」概念、すなわち「資本補填分+平均利潤」を含意する第二の「自然価格」概念が現われるのは第十一章の地代論においてである。

(注) ここで行論の都合上、『国富論』第一篇「労働の生産諸力における改善の諸原因について、また、その生産物が人民のさまざまな階級のあいだに自然に分配される秩序について」の章別構成を示しておけば、次のとおりである。

- 第一章 分業について
- 第二章 分業をひきおこす原理について
- 第三章 分業は市場の広さによって制限されるということ
- 第四章 貨幣の起源と使用について
- 第五章 諸商品の実質価格と名目価格について、すなわち、それらの労働価格と貨幣価格について
- 第六章 諸商品の価格の構成部分について
- 第七章 諸商品の自然価格と市場価格について
- 第八章 労働の賃金について
- 第九章 資財の利潤について
- 第十章 労働と資財のさまざまな用途における賃金と利潤について
- 第十一章 土地の地代について

さて、アダム・スミスは、『国富論』第一篇第四章の末尾で、第五章から第七章にいたる諸章の課題を次のように設定している。

「諸商品の交換価値を規制する諸原理を究明するために、私は、

第一に、この交換価値の実質的尺度とはどのようなものであるか、すなわち、すべての商品の実質価格はど

のようなものか、ということを明らかにしようと努力するつもりである。〔——第五章の課題〕

第二に、この実質価格は、どのようなさまざまな部分から構成されているか、つまり成りたっているか、ということも明らかにしようと努力するつもりである。〔——第六章の課題〕

そして最後に、価格のこれらのさまざまな部分のあるものまたはすべてのものを、ときには自然率または通常率以上に高め、またときにはそれ以下に引き下げるさまざまな事情はどのようなものであるか、すなわち、市場価格、いかえれば諸商品の実際価格 (the actual price) が、それらの商品の自然価格と呼ばれるべきものと正確に一致するのを妨げるさまざまな原因はどのようなものであるか、ということも明らかにしようと努力するつもりである。〔——第七章の課題〕」 (*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by Edwin Cannan, 6th edn., London, 1950, vol. I, p. 30. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』I、岩波書店、一

〇三頁。ただし訳文は必ずしも前掲訳書とおりではない。なお、この点は『資本論』ほかの邦訳書についても同様)。

つまり、スミスは、第五章～第七章全体の目標は「諸商品の交換価値を規制する諸原理を究明する」ことだとしたうえで、第七章については、その中心課題を、「市場価格、いかえれば諸商品の実際価格が、それらの商品の自然価格と呼ばれるべきものと正確に一致するのを妨げるさまざまな原因はどのようなものであるか」(傍点は引用者。以下、初出以外の引用で特記しない場合の傍点はすべて引用者のもの) という点の解明に置いているわけである。第七章についてのこうした課題設定は、「自由放任」の提唱者としての A・スミスの次のような問題意識、すなわち「独占は良好な経営の大敵であって、良好な経営は、自由で普遍的な競争による以外にはけっして至るところに確立できないものであり、しかも、この自由で普遍的な競争こそ、あらゆる人を自衛上やむなく良好な

経営に頼らせるようにするものである」(Ibid., p.118. 同上、二八四頁) という問題意識に支えられているといつてよい。そして、スミスの自然価格論を彼のこういう問題意識に即して、いわば思想的に検討することは、それ自身、重要で興味深い研究テーマをなすと考えられる。けれども本稿では、私は検討の重点を、第七章(および後続の第八、十章)で説かれているA・スミスの第一の「自然価格」概念と、第十一章において現われる彼の第二の「自然価格」概念とが、それぞれのようないし理論的意義をもつかを明らかにすることに置きたいと思う。というのは、そうすることによって生産価格論の学史的系譜が多少とも明確になると期待されうるからである。

要するに、『国富論』第一篇第七章、第十一章に見られるアダム・スミスの二重の「自然価格」概念を彼自身の所説に即して吟味・検討すること、こうして生産価格論の学史的系譜を可能なかぎり明確にすること——これが本稿におけるわれわれの主要な課題である。

〔II〕 A・スミスの狭義の自然価格論

一 スミスの自然価格・市場価格論

われわれはまず、『国富論』第一篇第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」の理論内容を見ることからはじめよう。

アダム・スミスは第七章の冒頭で、——「あらゆる社会またはその近隣には、労働や資財 (stock) のさまざまな用途ごとに、賃金と利潤との双方についての通常率あるいは平均率というものがある」、「また同様に、あらゆる社会またはその近隣には地代の通常率あるいは平均率というものがあつて……」、「これらの通常率あるいは平均率は、それらがあつておこなわれている時と場所での、賃金、利潤および地代の自然率 (the natural rates of wages, profit, and rent) と呼んでもよかつかえないかろう」(Cf. *The Wealth of Nations*, p. 57. 前掲訳書、一四三頁参照、傍点は引用者) という。そして、ひきつゞき彼は「自然価格 (the natural price)」を規定して次のようにいう。「ある商品の価格が、それを産出し調製し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃金と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがつて支払うのに十分で過不足がない場合、このときその商品は、その自然価格と呼んでもよかつかえないもので売られるのである」(Ibid., p. 57. 同上、一四三—一四四頁、傍点は引用者)、と。

したがつて、スミスの「自然価格」とは「それ(ある商品)を産出し調製し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃金と、資財の利潤とを、それらの自然率(「通常率あるいは平均率」)にしたがつて支払うのに十分で過不足がない」価格のことであり、簡単にいえば、それは平均賃金、平均利潤および平均地代の合計だということになる。われわれがさきに、A・スミスの第一の「自然価格」概念は(平均賃金+平均利潤+平均地代)を意味するといったゆえんである。

しかし、ここでわれわれは、スミスが賃金、利潤および地代の「自然率」(「通常率あるいは平均率」)について語るさいには、彼は自由競争が完全におこなわれる社会状態を想定している、という点に注意しなければならな

い。すなわち、スミスの「自然価格」概念は——彼自身の言葉でいえば——「事物がその自然の運行にしたがうように放任され、完全な自由がおこなわれ、そのうえ、自分が適当と思う職業を選ぶことについても、また、適当と思うたびごとに職業を変えることについても、あらゆる人が完全に自由な社会」(Cf. *ibid.*, p. 101. 同上、二一〇頁参照)を前提しているわけである。^(注)

(注) ちなみにマルクスは、ロートベルトゥス——「自分の祖先伝来の耕作区域や農耕中心や農耕民団などが頭のなかにあるボンメルンの一地主」たるロートベルトゥスを批判するにさいして、(i)「資本主義的生産がヘンリ七世以後のように農耕の伝統的な諸関係を容赦なく処理し、その諸条件を自分に適合させ従属させたところは、世界中どこにもない」こと、(ii)「イギリスの諸関係こそは、近代的土地所有、すなわち資本主義的生産によって変えられた土地所有がそのなかで十分に発展してきた唯一の諸関係である」ことなどを強調したのちに、「A・スミスの諸法則」が「自由競争を前提とする」点を指摘している(Vgl. *Theorien über den Mehrwert*, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, SS. 236-237. 『剰余価値学説史』第二分冊、『全集』②Ⅱ、三二二—三二三頁参照、傍点はマルクス)が、マルクスのこの指摘は当然、スミスの「自然価格」概念にも当てはまるところであろう。

さてスミスは、「ある商品がどう売られる実際の価格は、その市場価格と呼ばれる」(*The Wealth of Nations*, p. 58. 前掲訳書、一四四頁)として、こんどはこの市場価格と「自然価格」との関連を問題にする。そのさい彼はまず、「有効需要(the effectual demand)」を規定して次のようにいう。——「あらゆる個々の商品の市場価格は、実際にそれが市場にもたらされる量と、その商品の自然価格をよるこんで支払う人々の需要との割合、すなわち、それをそこへもたらすために支払われなければならない地代、労働(＝賃金、この点については後述)および利潤の全価値をよるこんで支払う人々の需要との割合によって規制される。このような人々の需要は、この商品を市場へもたらすことを有効にするのに十分であろうから、このような人々は有効需要者と呼んでさしつかえないし、

またこのような人々の需要は、有効需要と呼んでさしつかえない」(Ibid., p. 58. 同上、一四五頁、傍点は引用者)。

見られるように、スミスは「商品の自然価格をよるこんで支払う人々の需要」、あるいは「それ〔ある商品〕をそこ〔市場〕へもたらすために支払われなければならない地代、労働(≡賃金)および利潤の全価値をよるこんで支払う人々の需要」を——「このような人々の需要は、この商品を市場へもたらすことを有効にするのに十分であろう」という理由で——「有効需要」と規定する。^(注)これはしかし、供給側についてもスミスが、「商品を市場へもたらす」のに「十分」な価格は「自然価格」(≡平均賃金+平均利潤+平均地代)だと考えていたことを意味するのだが、それはともかく、彼によれば、右のように規定された「有効需要」と「市場へもたらされる量」との割合が当該商品の市場価格を「規制」する。すなわち、「市場へもたらされる量」が「有効需要」を下回るか、上回るか、ちょうどそれと一致するかに応じて、市場価格は「自然価格」以上になったり以下になったり、あるいはそれと正確に一致したりするわけである。

(注) なおスミスは、こういうものとしての「有効需要」を「絶対需要 (the absolute demand) から区別して次のようにいつている。——「それ〔有効需要〕は絶対需要とは異なる。きわめて貧しい者でも、ある意味では六頭だての馬車にたいする需要をもっているといえるし、彼はそれを所有したいと思うかも知れないが、彼の需要を満足させるためにこの商品が市場へもたらされることはけっしてありえないから、彼の需要は有効需要ではない」(Ibid., p. 58. 同上、一四五頁)。

念のために、いま、市場価格と「自然価格」との関連についてスミス自身の語るところを聞けば、次のごとくである。

(一)——「市場へもたらされるある商品の量が、有効需要におよぶ場合には、それをそこへもたらすために支払

われなければならぬ地代、賃金および利潤の全価値をよるこんで支払う人々の全部が全部、自分たちが欲するだけの量を供給されるはずはなからう。彼らのなかのある者は、全然それが得られないくらいなら、よるこんでそれ以上を与えてもよいと思うであろう。彼らのあいだには、ただちに競争がはじまるであろうし、市場価格は多かれ少なかれ自然価格以上に上昇するのであるが、その程度は、不足の大きさか、または競争者たちの富や放逸なげいたくかのいずれかが、たまたま多かれ少なかれ競争熱をおおる程度に応じる」(Ibid., p. 58. 同上、一四五頁、傍点は引用者)。

(二)——「市場へもたらされる量が有効需要を超過する場合には、それをそこへもたらすために支払われなければならない地代、賃金および利潤の全価値をよるこんで支払う人々に、その全部が売りつくされるはずはなからう。ある部分は、それ以下をよるこんで支払う人々に売られるにちがいないし、また、彼らがそれに支払う低価格が全体の価格を引き下げてしまうにちがいない。市場価格は多かれ少なかれ自然価格以下に下がるであらうが、その程度は、過剰の大きさが売り手たちの競争を多かれ少なかれ増進させる程度か、または、たまたまその商品を即刻にも処分してしまうことが売り手たちにとって重要かどうかに応じるのである」(Ibid., p. 59. 同上、一四六頁、傍点は引用者)。

(三)——「市場へもたらされる量がちょうど有効需要を充足し、それ以上に出ない場合には、市場価格は自然に自然価格と正確に同じになるか、または判断しうるかぎりそれと近似的に同じになる。手もちの全量は、この価格でなら売りさばけるであらうし、また、それ以上に売りさばけるはずはなからう。さまざまの商人が競争するから、彼らのすべては否応なしにこの価格を承認させられるが、これ以下の価格を承認させられることは

なり」(Ibid., p. 59. 同上、一四六頁、傍点は引用者)。

要するに、(i)「市場へもたらされるある商品の量」つまり供給量が「有効需要」を下回る場合には、「市場価格は多かれ少なかれ自然価格以上に上昇する」、(ii)ある商品の供給量が「有効需要」を超過する場合には、「市場価格は多かれ少なかれ自然価格以下に下がる」、(iii)供給量がちょうど「有効需要」に見合うときには、「市場価格は自然に自然価格と正確に同じになるか、または判断しうるかぎりそれと近似的に同じになる」、というのがスミスの考えである。

そしてスミスによれば、「市場へもたらされるあらゆる商品の量は、自然に有効需要に適合する」(Ibid., p. 59. 同上、一四六頁)。なぜならば、「その量が有効需要を越えて超過しないということは、ある商品を市場へもたらすためにその土地、労働または資財を使用するすべての人々の利益であり、また、それがその需要におよぼぬようなことがけつてないということは、他のすべての人々の利益だ」(Ibid., p. 59. 同上、一四六—一四七頁)からである。こうしてスミスの「自然価格」(≡平均賃金+平均利潤+平均地代)は、「いっさいの商品の価格がたえずそれにひきつけられている中心価格(the central price)」(Ibid., p. 60. 同上、一四八頁、傍点は引用者)であり、市場価格の運動の重点をなすものといふことができる。(注²)

(注¹) スミスは、この間の事情をいっそう詳しく説いて次のように述べている。

「もしある場合にこの量「ある商品の供給量」が有効需要を超過すれば、その価格の構成部分のあるものは、自然率以下で支払われるにちがいない。もしそれが地代なら、地主たちの利害関係が彼らを刺激し、即刻にもその土地の一部を引き上げさせるであろうし、またもしそれが賃金または利潤なら、前者の場合には労働者の利害関係が、また後者の場合にはその雇い主の利害関係が、彼らを刺激し、即刻にも彼らの労働なり資財なりの一部をこういう仕事か

ら引き上げさせるであろう。市場にもたらされる量は、間もなくちょうど有効需要を充足するに足りるだけのものになるであろう。その価格のさまざまな構成部分のすべては、その自然率にまで上昇し、また全価格もその自然価格にまで上昇するであろう。

「これに反し、もしある場合に、市場へもたらされる量が有効需要におよばないようなことが起これば、その価格の構成部分のあるものは、自然率以上に上昇するにちがいない。もしそれが地代なら、他のすべての地主の利害関係が自然に彼らを刺激し、この商品を産出するためにいっそう多くの土地を用意させるであろうし、また、もしそれが賃金または利潤なら、他のすべての労働者や商人の利害関係が、間もなく彼らを刺激し、それを調製したり市場へもたらしたりするために、いっそう多くの労働や資財を使用させるであろう。そこへもたらされる量は、間もなく有効需要を充足するに足りるようになるであろう。その価格のさまざまな構成部分のすべては、間もなくその自然率にまで下がり、また全価格もその自然価格にまで下がるであろう」(*Ibid.*, pp. 59-60. 同上、一四七頁)。

付言すれば、ここでのスミスの所論についてはわれわれは、のちに行論の過程で、あらためてそれを問題にすることになる。

(注2) この点にかんしてスミスは次のようにいっている(一部既出)。

「……自然価格は、いわば、いっさいの商品の価格がたえずそれにひきつけられている中心価格である。さまざまな偶然事は、これらの価格を、ときにはこの中心価格をずっと上回ってつり上げておくかも知れないし、また、ときには幾分それを下回って無理に引き下げてしまうことさえあるかも知れない。しかしながら、これらの価格がこの静止と持統との中心に落ちつくのを妨げる障害がどのようなものであろうとも、それらは恒常的にこの中心を指向しているのである」(*Ibid.*, p. 60. 同上、一四八頁)。

なお、スミスのこのような自然価格・市場価格論は、もちろん、彼の独創によって突如として出来上ったものではなく、彼が生きた時代の経済状態および思想状況を背景として形成されたものである。この点、ロンド・L・ミーク『労働価値論史研究』——とくにその第一章4『自然価格』の古典的概念』(*Studies in the Labour Theory of Value*, London, 1956, pp. 24-32. 水田洋・宮本義男訳、日本評論新社、一八一—二九頁)——は、スミスの先駆者たち(リチャード・カンティロン、ジョージフ・ハリス、ウィリアム・テンブル)の所説をとりあげていて興味深い。

ところでアダム・スミスは、さらにすすんで、「……ときには特定の偶然事が、またときには自然的諸原因が、さらには行政上の特定の諸法規が、多くの商品の市場価格を長期間にわたってその自然価格よりずっと高いままにしておくことがある」(*The Wealth of Nations*, p. 62. 前掲訳書、一五〇頁)として、諸商品の市場価格を長期的にそれらの「自然価格」から乖離させるさまざまな事情——商業上・技術上の秘密、個人または「商社会社」に授与された独占、同業組合の排他的諸特権、徒弟条例、等々——を考察する。そのさいスミスは、たとえば、「個人が商社会社かのいづれかに授与された独占」について、「独占者たちは市場を恒常的に供給不足にしておくことによって、つまり有効需要をけつして余すところなく充足させないことによって、自分たちの諸商品を自然価格よりずっと高く売り、それが賃金であろうと利潤であろうと、自分たちの利得をそれらの自然率以上に甚だしく引き上げるのである」(*Ibid.*, p. 63. 同上、一五二頁)と力説する。そして彼はまた、「自然的諸原因が……商品の市場価格を長期間にわたってその自然価格よりずっと高いままにしておく」場合を問題にして次のように論述する。

「自然の生産物によっては、非常に特異な土壌や位置を必要とするものもあるので、その生産に適した土地は、大國の土地のすべてを挙げて、なお有効需要を充足するのに足りないことがありうるほどである。それゆえ、市場へもたらされるその全量は、それを生産した土地の地代を、それを調製したり市場へもたらしたりするために使用された労働の賃金や資財の利潤といっしょに、それらの自然率にしたがって支払うに足りる以上のものをよるこんで与える人々に売りさばかれるであろう。こういう商品は、まるまる幾世紀ものあいだ、ひきつづきこの高価格で売られるであろうが、この場合、その価格のなかで土地の地代に分解される部分は、

一般にその自然率を上回って支払われる部分である。こうした特異で珍重される生産物を産出する土地の地代は、とくに地味や位置に幸いされたフランスのある葡萄園の地代がそうであるように、同等に多産的で同等によく耕作されたその近隣の他の土地の地代にたいして規則的な比例をまったくもたない。これに反して、このような商品を市場へもたらすために使用される労働の賃金と資財の利潤とが、その近隣で他に使用される労働や資財のそれらにたいして、その自然的割合を越えることはめったにない」(Ibid., pp. 62-63. 同上、一五二頁)。

ここでのスミスの主張内容は、およそ次のようだといいよかろう。——「非常に特異な土壤や位置を必要とする」「自然の生産物」の場合には、「こうした特異で珍重される生産物を産出する土地」の存在が限られているので、「市場へもたらされるその全量」は「有効需要」の充足のために十分ではない、したがって、このような商品の市場価格は「まるまる幾世紀ものあいだ」恒常的にその「自然価格」(\parallel 平均賃金 + 平均利潤 + 平均地代 ∇) よりも高いままになる、しかし「このような商品を市場へもたらすために使用される労働の賃金と資財の利潤とが、その近隣で他に使用される労働や資財のそれらにたいして、その自然的割合を越えることは(自由競争の結果)めったにない」から、こうした特殊な商品を産出する土地——たとえば「とくに地味や位置に幸いされたフランスのある葡萄園」——の地代は、「同等に多産的で同等によく耕作されたその近隣の他の土地の地代」とは無関係な独占地代になる、と。スミスのこうした主張については、われわれはあとで立ち帰ることにして、ここでは、もっと彼の所説を聞くことにしよう。

アダム・スミスは、「ある商品の市場価格が、たとえ長く自然価格を上回ることはあっても、ひきつづき長くそれを下回ることはめったにありえない」として次のようにいう。——「自然率以下に支払われるのがどのよう

な部分であろうとも、その利害関係に影響をこうむる人々は、ただちに損失だと思い、その土地、その労働またはその資財のいずれかを、その用途からただちに引き上げるであろうから、市場へもたらされる量は間もなく有効需要をちょうど充足するに足りるだけになるであろう。それゆえ、その市場価格は間もなく自然価格にまで上昇するであろう。少なくとも、完全な自由がおこなわれていたところでは、これが事実であろう」(ibid., p. 64. 同上、一五三―一五四頁)。

すなわち、スミスの考えでは、商品の市場価格は——「特異で珍重される生産物」の場合のように自然的原因のために、あるいは「独占者たち」による供給制限の場合のように人為的原因のために——恒常的に「自然価格」を上回ることとはあっても、完全な自由競争がおこなわれているかぎり、「ひきつづき長くそれ」〔「自然価格」を下回ることとはめったにありえない〕のである。そのわけは、「自然率以下に支払われるのがどのような部分であろうとも、その利害関係に影響をこうむる人々は、ただちに損失だと思い、その土地、その労働またはその資財のいずれかを、その用途からただちに引き上げる」からである。

以上、われわれは、『国富論』第一篇第七章における自然価格・市場価格論の眼目と思われる部分を見てきたのであるが、いまやわれわれは次のようにいうことができよう。——第七章で提示されている「自然価格」概念は平均賃金＋平均利潤＋平均地代 \vee を含有するものであり、そこでは、こういうものとしての「自然価格」が、「商品を市場へもたらす」のに「十分」な価格であるとともに、「いっさいの商品」の市場価格がたえずそれを指向する「中心価格」だとされている、と。もともと、アダム・スミスは、商品の市場価格が自然的原因または人為的原因のために、長期間にわたって「自然価格」を上回る場合があるととして、市場価格を恒常的に「自然価

格」から乖離させる諸事情を問題にするのだが、しかし、いま見たように、彼は「ある商品の市場価格が、たとえ長く自然価格を上回ることはあっても、「完全な自由」がおこなわれるかぎり」ひきつづき長くそれを下回ることはめったにありえない」と考へる。

さて、ここでわれわれは、本節のはじめに掲げた一連の引用文においてスミスが、「自然価格」とは「それ〔ある商品〕を産出し調製し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃金と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がない」価格だとしていたこと、また「有効需要」の説明にさいして彼が、「自然価格」をもって「それ〔ある商品〕をそこ〔市場〕へもたらすために支払われなければならない地代、労働〔賃金〕および利潤の全価値」だとしていたことを想起しなければならない。スミスが「自然価格」を右のように規定する場合には、いったい彼はどんな理論的見地に立っているのであるか？

また、 Δ 平均賃金 $+$ 平均利潤 $+$ 平均地代 \surd を含意する彼の第一の「自然価格」概念は、いったい、どのような理論的意味をもっているのであろうか？ こうした諸点を考察するには、しかし、価値論および分配論におけるスミスの所説をとりあげることが是非とも必要である。そこでわれわれは、——迂遠なようだが、スミス「自然価格」概念の検討にあたっての予備的考察という意味合いにおいて——以下の二つの節で彼の価値論および分配論の内容をやや詳しく見ておくことにしよう。

二 投下労働説と支配労働説

『剰余価値学説史』(第二分冊)のなかでマルクスは、経済理論一般におけるA・スミスの二重性ないし動揺を指摘して次のようにいっている。——「スミス自身は非常に素朴に、たえまない矛盾のなかで動揺している。一面では、彼は、経済学的諸範疇の内的関連を、すなわちブルジョア経済体制の隠れた構造を追究する。他面では、彼は、これとならんで、競争の諸現象のうちに外観的に与えられているとおりの関連を、したがってまた、実際にブルジョアの生産の過程にとらわれてそれに利害関係をもつ人とまったく同様な非科学的な観察者にたいして現われるとおりの関連を、併置している。この二つの把握方法——そのうちの一方は、ブルジョアの体制の内的関連のうちに、いわばその生理学のうちに突入するものであり、他方はただ、生活過程のうちに外的に現われるものを、それが現われ現象するとおりに、記述し、分類し、物語り、そして図式的な概念規定を与えるにすぎないものであるが——、この二つの把握方法がスミスの場合には平気で併存しているだけでなく、入り乱れ、たえず矛盾し合っているのである」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 162. 『学説史』第二分冊、『全集』^② II, 二〇—二二頁)。

つまり、アダム・スミスは、「二つの把握方法」——『学説史』における別の箇所での表現でいえば「深遠な考察方法 (die esoterische Betrachtungsweise)」と「通俗的な考察方法 (die exoterische Betrachtungsweise)」——をもっていて、一面では、「経済学的諸範疇の内的関連」あるいは「ブルジョア経済体制の隠れた構造」を

分析し解明するのだが、同時に他面では、事態を、それがブルジョアの生産当事者たちにたいして現われるままに叙述し、「競争の諸現象のうち外観的に与えられているとおりの関連」を描き出すわけである。そして彼は、「深遠な考察方法」のもとでは、商品の価値をその商品に投下された労働の量によって規定し、賃金、利潤および地代をいずれも商品価値の分解部分として把握する。すなわち、科学的な見地に立つスミスは投下労働説と分解価値説とを展開する。ところが彼は、他方では、「通俗的な考察方法」のもとに支配労働説と構成価値説を論述する。いかえれば、皮相で外面的な立場に立つスミスは、商品の価値をその商品が支配し購買しうる労働の量によって規定し、賃金、利潤および地代をもって交換価値の構成者だと解するわけである。しかも、右の引用文でマルクスが指摘しているように、「（上記の）二つの把握方法がスミスの場合には平気で併存しているだけでなく、入り乱れ、たえず矛盾し合っている」のであって、だからスミスにあっては、価値論では投下労働説と支配労働説との交錯が、また分配論においては分解価値説と構成価値説との交錯が特徴的だということになる。以下、この節では、A・スミスの投下労働説および支配労働説の内容をいくらか立ち入って考察することにする。

(注) この間の事情については、かつて私は、論文「価値論および分配論におけるアダム・スミスとリカードウ(上、下)」(本誌・第六卷第一号、第二号)のなかで、かなり詳しく考察したことがある。この論文は拙著『資本論研究序説』(日本評論社)に収録されているので、その前篇「古典経済学」の第二章「価値論および分配論におけるA・スミスの二重性」を参照されたい。

はじめに、『国富論』第一篇第六章「諸商品の価格の構成部分について」から、スミス投下労働説の基本命題の一つと考えられる文章を引用しておけば、次のごとくである。

「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態のもとでは、さまざまな対象物を獲得す

るために必要な労働量のあいだの割合が、これらの対象物を互いに交換するための規則になりうる唯一の事情であるように思われる。たとえば、もし狩猟民族のあいだで、通常、一頭のビーヴァを殺すには、一頭の鹿を殺すのに必要な労働の二倍を要するとすれば、一頭のビーヴァは、当然、二頭の鹿と交換され、つまり二頭の鹿に値いすることになるであろう。通常二日または二時間の労働の所産であるものが、通常一日または一時間の労働の所産であるものの二倍に値いするのは当然である」(『The Wealth of Nations』, p. 49. 前掲訳書、一三二頁)。

見られるように、ここではスミスは、「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態」、すなわち生産者たちがまだ商品所有としてのみ対応し合う社会状態を問題にしているのだが、彼は、こういう社会状態において「対象物を互いに交換するための規則」となりうるのは、ただ、「さまざまな対象物を獲得するために必要な労働量のあいだの割合」だけだとして、この点を例をあげて説明するのである。だから、ここでスミスが、商品の価値をその生産に必要な労働時間、あるいはその商品に投下された労働量によって規定し、こうして投下労働説を展開していることは明白であろう。また、それゆえにこそ、リカードウは『経済学および課税の原理』(第一章第一節)のなかで、みずからの投下労働説を確証するものとして右の一文を『国富論』中の他の諸章句とともに引用したのちに、ここに「経済学におけるもっとも重要な学説」があるとしたのであった(Cf. *On the Principles of Political Economy and Taxation, The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, Cambridge University Press, vol. I, 1953, p. 13. 堀絳夫訳『経済学および課税の原理』、『デイヴィド・リカードウ全集』第一巻、雄松堂書店、一五—一六頁参照)。

ところでスミスは、『国富論』第一篇第五章「諸商品の実質価格と名目価格について、すなわち、それらの労

働価格と貨幣価格について」のなかで次のように述べている。

「あらゆるものの実質価格、つまり、あらゆるものがそれを獲得しようとする人に現実に費やさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞である。それを獲得して売りさばいたり、他のものと交換したりしようとする人にとって、あらゆるものが現実にとれほどの値いがあるかといえば、それはこのものがその人自身に節約させうる労苦や煩勞であり、また、このものが他の人々に課しうる労苦や煩勞である。貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得しうるものとまったく同様に、労働によって購買されるのである。貨幣または財貨は、事実上、この労苦をわれわれからはぶいてくれる。これらの貨幣または財貨は、一定量の労働の価値を含んでおり、われわれはそれらを、そのときに等量の価値を含むと考えられるものと交換するのである。労働こそは最初の価格、つまりいっさいのものに支払われた本源的な購買貨幣であった。世界のいっさいの富が最初に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってであって、富を所有している人々、またはそれをある新しい生産物と交換しようとする人々にとってその価値は、それがそういう人々に購買または支配させうる労働の量に正確に等しいのである」(The Wealth of Nations, pp. 32-33. 前掲訳書 一〇五—一〇六頁、—〈引用A〉)。

この〈引用A〉ではミスは、「あらゆる人が交換によって生活する、つまりある程度商人になる」ような「商業社会(the commercial society)」(Cf. *ibid.*, p. 24. 同上、九三頁参照)を想定しているのであるが、この「商業社会」は、そこではまだ「資財の蓄積と土地の占有」が見られず、生産者たちが相互に商品所有者としてのみ対応し合うとされている点では、いわゆる「初期未開の社会状態」の場合と同じだといえることができる。それはそれと

して、右の△引用A▽における最後のセンテンスを一読したところでは、スミスはここでは、商品の価値をその商品が支配し購買しうる労働量によって規定しているようにも思われる。しかし、そうではなく、スミスはここで商品も商品の価値を、その商品の生産に必要な労働量によって規定しているのである。この点は△引用A▽の前半部分で彼が、「あらゆるものの実質価格(the real price)」はそれらを獲得するための「労苦や煩勞(fail and trouble)」
|| 「労働」だとしながら、商品の売買を等労働量交換に還元していることから明らかであろう。けれども、マルクスが指摘しているように (Vgl. *Theorien*, Teil I, MEW, Bd. 26, Teil I, SS. 45-47. 『学説史』第一分冊『全集』②1、五五―五七頁参照)、スミスがここで重点を置こうとしているのは、分業によってひきおこされた変化である。すなわち、ここではスミスは、商品の「実質価格」ないし「価値」を投下労働量によって規定しながら、(i)分業が確立されて「あらゆる人が交換によって生活する」ようになる「商業社会」においては、生産者の富は彼自身の労働の生産物には依存せず、彼が支配しうる他人の労働の量に正確に比例するという点、(ii)この場合、生産者がどれだけ他人の労働を支配しうるかは、彼自身の生産物に含まれている労働の量に依存する、という点を強調しているわけである。もっとも、右の△引用A▽でスミスが、「労働」(=「労苦や煩勞」と「労働の価値」とを同義語と見なして、「これらの貨幣または財貨は、一定量の労働の価値を含んでおり、われわれはそれらを、そのときに等量の(労働の)価値を含むと考えられるものと交換するのである」といい、また「労働こそは最初の価格、つまりいっさいのものに支払われた本源的な購買貨幣であった」と主張する場合には、彼は、あたかも労働そのものが価値をもつかのよう考えて、すでに支配労働説への傾斜を示しているのであるが。

ところで、スミスのいう「初期未開の社会」ないし「商業社会」では生産された全生産物は生産者自身に属す

るのだから、ここでは、商品に投下された労働量と、その商品が支配し購買しうる労働量とはまったく一致する。だからスミスはいう。——「こういう事態（「初期末開の社会状態」）のもとでは、労働の全生産物は労働者に属し、また、ある商品の獲得または生産にふつう費やされる労働の量は、その商品がふつう購買し支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規制しうる唯一の事情である」（*The Wealth of Nations*, pp. 49-50. 前掲訳書、一三二頁、傍点は引用者）。

ここでスミスがいつているのは、「初期末開の社会状態」では生産者たちは商品の姿をとった労働を相互に交換し合う、そしてそのさい、彼らが支配しうる他人の労働の量は彼ら自身の商品の価値、すなわちその商品に含まれている労働の量に等しい、という点にはかならない。^(註)つまり、ここでもスミスは投下労働説の見地に立っているわけである。

(注) 第八章「労働の賃金について」の冒頭では、この点がもっと明確な形で論述されている。——「労働の生産物は、労働の自然的報酬つまり自然的賃金をなす。／＼土地の占有と資財の蓄積との双方に先行する事物の本源的な状態のもとでは、労働の全生産物は労働者に属する。彼は、ともに分け合うべき地主も親方ももっていない。／＼もしこの状態がつついていたら、労働の賃金は、分業によってひきおこされる生産諸力のいっさいの改善とともに増加したであろう。すべてのものは次第により安価になったであろう。それらのものは、より少量の労働によって生産されたであろうし、またこういう事態のもとでは、等量の労働によって生産された諸商品は、当然、互いに交換されたであろうから、それらは同様により少量の労働の生産物で購買されたであろう。」（*Ibid.*, p. 66. 同上、一五七頁、傍点は引用者）。

なおまたスミスは、右のような投下労働説の観点から、労働の生産性の変化が商品価値におよぼす影響を問題にしながら、ひきつづき次のようにも論じている。

「しかしながら、たとえいっさいのものが、じつはより安価になったにしても、外観上、多くのものは、まえより

も高価になったかも知れない、すなわち、より多量の他の財貨と交換されたかも知れない。たとえば、大多数の職業においては、労働の生産諸力が十倍に改善され、すなわち一日分の労働が本来のその十倍量の所産を生産できるのに、ある特定の職業においては、それらが二倍にしか改善されず、すなわち一日分の労働が以前のその二倍量の所産しか生産できない、と仮定しよう。大多数の職業における一日分の労働の生産物を、この特定の職業における一日分の労働のそれと交換する場合には、前者における本来的には十倍量の所産は、後者における本来的には二倍の所産しか購買しないであろう。それゆえ、後者のある特定量、たとえば重量一ポンドは、まえよりも五倍も高価になったように見えるであろう。それにもかかわらず、実際には、それは二倍だけ安価になるであろう。たとえそれを購買するには五倍量の他の財貨を必要とするにしても、それを購買するにも生産するにも、半量の労働しか必要としないであろう。それゆえ、この獲得はまえの二倍だけたやすくなるであろう」(Ibid., pp. 66-67. 同上、一五七—一五八頁)。

ここではスマスは、事実上ではあるが価値と交換価値とを区別しながら、諸商品の価値変動がそれらの交換価値または相対価値においてはどのように現われるかをほぼ適切に説いているといつてよからう。

しかしながら、スマスが次のように主張する場合には、すでに彼は投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定との混同に陥っている。

「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値がある、といつてさしつかえなからう。彼の健康、体力および精神が平常の状態で、また彼の熟練と技巧が通常程度であれば、彼は自分の安業、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならない。彼が支払う価格は、それとひきかえに彼が受けとる財貨の量がどれほどのものであらうとも、つねに同一であるにちがいない。実際のところ、この価格が購買するこれらの財貨は、あるときはより多量であらうし、またあるときはより少量であらうが、しかし、変動するのはこれらの財貨の価値なのであって、それらを購買する労働の価値ではない。いつ

どのようなところでも、得がたいもの、つまり多くの労働を費やさなければ獲得できないものは高価であり、たやすく得られるもの、つまり極めて僅少の労働で得られるものは安価である。したがって、それ自体の価値においてけっして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されるところの、究極かつ真の標準である。労働はいっさいの商品の実質価格であるが、貨幣はその名目価格であるにすぎない」(Ibid., p. 35. 同上、一〇九頁、—《引用B》)。

右の《引用B》でスマスは、「彼(労働者)の健康、体力および精神が平常の状態で、また彼の熟練と技巧が通常、程度であれば、彼は「等量の労働」をおこなうさいには「自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならない」というときには、マルクスが評価しているように(Vgl. *Das Kapital*, Bd. I, MEW, Bd. 23, S. 61. 『資本論』第一巻、『全集』② a, 六三頁参照)、「彼(スマス)は、商品の価値に表わされるかぎりでは労働はただ労働力の支出として認められるだけだということを予感している」といってよい(ただし、スマスは「この支出を再びただ休息や自由や幸福の犠牲と考えているだけで、正常な生命活動だとは考えていない」のだが)。またスマスが、「いつどのようなところでも、得がたいもの、つまり多くの労働を費やさなければ獲得できないものは高価であり、たやすく得られるもの、つまり極めて僅少の労働で得られるものは安価である」と述べる場合にも、彼は、明らかに投下労働説の立場を固持している。しかしスマスは《引用B》の他の部分では、商品の価値をその商品が支配し購買しうる労働量によって規定しようとしており、だからまた彼は、労働そのものが価値をもつかのように考えながら、「労働の価値」の不変的性格を証拠だてるのに懸命である。こうしてスマスは右の《引用B》では、投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定とをすっかり混同しており、投下

労働説と支配労働説とを文字どおり交錯的に展開しているのである。

しかし、ここでわれわれは、アダム・スミスが支配労働量あるいは「労働の価値」について語るさいには、(i)「彼〔労働者〕が支払う価格」、つまり労働者が労働にさいして払う犠牲が念頭に置かれていた場合と、(ii)「労働の価格」すなわち賃金が表象に浮かべられている場合とがある、という点に注意しなければならない。まず、右の場合についていえば、前掲の△引用B▽でスミスが、「彼〔労働者〕は〔等量の労働〕をおこなうさいには」自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならない」と考えながら、「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値がある」と主張する場合がそうである。この場合には、スミスは、労働は価値の実体ではあるが価値をもたないという点を理解できずに、あたかも、生きた労働そのものが価値をもつかのように考えているといわなければならない。しかもアダム・スミスは、労働時間が価値の尺度だという意味での内在的価値尺度と、貨幣が価値の尺度だという意味での外在的価値尺度とを混同するので、「それ自体の価値において決して変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されるところの、究極かつ真の標準である」と強調する。しかし、スミスがこのようにいうときには、彼は、商品価値の「究極かつ真の標準」になりうるのは不変の価値をもつ商品だけだと考えながら、支配労働をもって最良の「標準」(≡外在的価値尺度)と見なしているのである。^(注)そして△引用B▽でスミスが、「労働はいっさいの商品の實質価格であるが、貨幣はその名目価格であるにすぎない」としているのは、このような見地からだといってよい。また彼が、『国富論』第五章の標題そのものを「諸商品の實質価格と名目価格について、すなわち、それらの労働価格と貨幣価格について」というふうにし

「諸商品の実質価格 (the real price of commodities)」を「それらの労働価格 (their price in labour)」と呼びかえているのも、同じ見地からのごとであらう。

(注) げんにスマスは、第一篇第五章のなかで、「人間の足の長さとか、一尋ひとひらとか一握ひとにぎとかいうような、それ自体の量がたえず変動する量の尺度が他の諸物の量の正確な尺度にはけつしてなりえないように、それ自体の価値がたえず変動する商品もまた、他の諸商品の価値の正確な尺度にはなりえない。」(*The Wealth of Nations*, p. 35. 前掲訳書、一〇九頁、傍点は引用者)と述べ、さらに同章で次のようにも述べている。

「……労働は価値の唯一の普遍的な尺度であり、また唯一の正確な尺度でもあるということ、すなわち労働は、いつでも、またどこでも、われわれがそれによってさまざまな商品の価値を比較しうる唯一の標準であるということは、明白であるように思われる。われわれが、世紀から世紀にかけて、さまざまな商品の実質価値をそれらとひきかえに与えられる銀の量によって評価できないことは認められている。われわれは、年々の場合でも、穀物の量によってそれを評価することはできない。労働の量によるのなら、われわれは、世紀から世紀にかけても、年々についても、もつとも正確にそれを評価することができる。世紀から世紀にかけてであれば、穀物は銀よりも優れた尺度であつて、それというのでも、世紀から世紀にかけての場合、等量の穀物のほうが、等量の銀よりもいっそう近似的に同一量の労働を支配するだらうからである。これに反し、年々の場合であれば、等量の銀はいっそう近似的に同一量の労働を支配するであらうから、銀は穀物よりも優れた尺度なのである」(*Ibid.*, pp. 38-39. 同上、一一五頁、傍点は引用者)。

ここでスマスが、「労働の量によるのなら、われわれは、世紀から世紀にかけても、年々についても、もつとも正確にそれ〔さまざまな商品の実質価値〕を評価することができる」と主張するとき、彼のこうした主張を支えているのは、△引用B▽に示されていた彼の次のような確信である。すなわち、「彼〔労働者〕の健康、体力および精神が平常の状態で、また彼の熟練と技巧が通常程度であれば、彼は〔等量の労働〕にさいしては」自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならぬ」のだから「等量の労働は、いっどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値がある」という確信である。そして繰り返していえば、スマスがこのように力説するのは、彼が内在的価値尺度と外在的価値尺度とを混同して、「……それ自体の価値がたえず変動する商

品もまた、他の諸商品の価値の正確な尺度にはなりえない」と考えるからである。

さて、つぎに前記の(ii)の場合、すなわちスミスが支配労働量あるいは「労働の価値」のもとに「労働の価格」つまり賃金を表象している場合について見ることにしよう。スミスは第一篇第五章で次のようにいっている。

「本書『国富論』のような著作では、さまざまな時と所で、特定の商品のさまざまな実質価値を比較すること、すなわち、いろいろの場合に、特定の商品がそれを所有していた人に与えたであろう他の人々の労働にたいする支配力のさまざまな程度を比較することは、ときには有益であろう。こういう場合、われわれは、それとひきかえにふつうこの商品が売られた銀のさまざまな量を比較するよりも、むしろ銀のそれらのさまざまな量で購買しえた労働のさまざまな量を比較しなければならない。しかしながら、時と所をへだてた労働の時価を、ある程度正確に知るなどということはほとんど不可能である。穀物の時価ならば、たとえ規則的に記録されている場所は少ないとはいえ、一般によりよく知られているし、歴史家やその他の著述家がよりしばしば注意もしてきたことである。それゆえ、われわれは一般にそれで満足しなければならないのであって、そうするのは、穀物の時価が労働の時価とつねに正確に同一割合だからではなくて、ふつうわれわれが手にしうるものなかではその割合にもっとも近いものだからである」(Ibid., p. 40. 同上、一七一一—一八一頁、傍点は引用者)。

ここでスミスが「特定の商品のさまざまな実質価値」を、「特定の商品がそれを所有していた人に与えたであろう他の人々の労働にたいする支配力」によって、つまり支配労働量によって規定していること、そしてそのさい、「他の人々の労働にたいする支配力」という言葉のもとにスミスが実際に表象に思い浮かべているのが「労働の時価 (the current prices of labour)」＝賃金であることは、明らかであろう。

すで見たとように、アダム・スミスはさきには商品の「実質価格」ないし「価値」を、「それを獲得するための労苦や煩勞」すなわち投下労働量によって規定したのであったが、いまや彼は、商品の「実質価値」をその商品が支配し購買しうる労働量——「労働の時価」あるいは賃金——によって規定するわけである。こうしてA・スミスは、あるときは商品の価値を投下労働量によって規定し、またあるときはそれを支配労働量によって規定するのである。

マルクスは、『剰余価値学説史』（第一分冊）のなかで、価値規定におけるスミスのこうした二重性を問題にしながら、次のように書いている。——「私は、すでにこの著書の最初の部分『経済学批判』第一章「商品」を指す）で商品の分析をしたさいに、いかにA・スミスが交換価値の規定において動揺しており、またとくに、商品の生産に必要な労働量によるその商品の価値の規定と、それをもって商品を買うことができるところの生きた労働の量とを、または同じことであるが、それをもって一定量の生きた労働を買うことができるところの商品の量とを、あるときはいかに混同し、またあるときはいかにこれによって押しつけているかを指摘した。この場合、彼は、労働の交換価値を商品の価値の尺度にしているのである。事実上は賃金を尺度にしているのである。というのは、賃金は、一定量の生きた労働で買われる商品の量に等しく、あるいは一定量の商品で買うことのできる労働の量に等しいからである。労働の価値、というよりむしろ労働能力の価値は、他のどの商品とも同じように変動し、他の諸商品の価値から特別に区別される点はない。ここでは価値が価値の度量標準および説明理由にされしており、したがって『悪循環』である』（*Theorien, Teil I, MEW, Bd. 26, Teil I, SS. 41-42. 『学説史』第一分冊*

『全集』^②一、五〇頁、傍点はマルクス）。

すでに述べたように、「初期未開の社会状態」ないし「商業社会」では「労働の全生産物」は生産者自身に帰属するのだから、そこでは当然、商品に投下された労働量と、その商品が支配し購買しうる労働量とは一致する。いいかえれば、こういう社会状態では、商品に含まれている労働の量と、「労働の価値」——「一定量の生きた労働で買われる商品の量」または「一定量の商品で買うことのできる労働の量」——とは一致する。だからまた、そこでは支配労働量あるいは「労働の価値」が、投下労働量と同じように商品価値の内在的尺度となりうるかのよう^にに思われる。アダム・スミス——「労働 (labour)」と「労働の生産物 (the produce of labour)」をとたえず等置するスミスは、事実そのように考えて、投下労働量による価値規定と支配労働量による価値規定をとともに正しいと見なしたのであった。^(注)だが、スミスのいう「初期未開の社会状態」においてさえ、支配労働量はたんに投下労働量の指数となりうるだけであって、これを内在的価値尺度と解することは、それ自身において間違っている。前掲引用文でマルクスが指摘しているように、この場合にはスミスは、商品の価値を「労働の交換価値」(傍点はマルクス)すなわち賃金——スミス自身の用語でいえば「労働の自然的報酬つまり自然的賃金」——によって規定しようと試みているのであり、したがって、ここでは彼は、価値の説明にさいして価値そのものを前提するという「悪循環」に陥っているのである。

(注) この点にかんしてマルクスはこういっている。「[スミスにおける]労働と労働の生産物との等置は、……諸商品に含まれている労働量による諸商品の価値の規定と、諸商品が買いうる生きた労働の量による諸商品の価値の規定すなわち労働の価値によるその規定との混同をひきおこす最初の誘因になつてゐる」(Theorien, Teil I, MEW, Bd. 26, Teil I, S. 47. 『学説史』第一分冊『全集』②一、五八頁、傍点はマルクス)。

なお、スミスが「労働」と「労働の生産物」とをたえず等置するというこの点は、たとえば第一篇第五章「諸商品
アダム・スミスの自然価格論について(上)」(岡崎)

の実質価格と名目価格について……」における次の一文からしても明らかであろう。

「ホップズ氏がいうように、富は力である。けれども、大きな財産を獲得または相続する人は、必ずしも民政上ないしは軍事上の、なんらかの政治権力を獲得または相続するとはかぎらない。彼の財産は、おそらくその両者を獲得する手段を彼に与えはするであろうが、この財産をただ所有しているというだけでは、必ずしもそのいずれかが彼にもたらされるとはかぎらない。その所有が、ただちに、しかも直接に彼にもたらす力は、購買力、すなわち、そのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働の生産物にたいする一定の支配である。彼の財産の大小は、この力の大きさ、つまりその財産が彼に購買または支配させうる他の人々の労働の量か、またはこれと同じことであるが、他の人々の労働の生産物の量か、いづれかに正確に比例する」(*The Wealth of Nations*, p. 33. 前掲訳書一〇六頁、傍点は引用者)。

要するに、アダム・スミスが商品の価値を、その商品が支配し購買しうる労働の量によって規定する場合には、彼は「通俗的な考察方法」のもとに、もっとも現象的な意味での交換価値、すなわち単なる購買力としての交換価値を取り扱っているにすぎないわけである。ちなみに、ここで単なる購買力というのは、——ふたたびスミスの言葉でいえば——「特定の対象の所有がもたらす他の財貨にたいする購買力」(*Ibid.*, p. 30. 同上、一〇二頁)のことであり、また、ある「財産」の所有がもたらすところの、「そのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働の生産物にたいする一定の支配」のことである。

さて、これまでのところでは、アダム・スミスは「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態」ないし「商業社会」を想定していたといつてよい。もっとも、マルクスも指摘しているように(*Vgl. Das Kapital*, Bd. I, *MEW*, Bd. 23, S. 61. 『資本論』第一巻、『全集』^②a、六三頁参照)、前掲△引用B▽でスミスが、「等量の労働は、いっつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値がある」という点を示そうとして、

「彼の健康、体力および精神が平常の状態で、また彼の熟練と技巧が通常程度であれば」云々と述べるさいには、すでに実際上は「彼〔スミス〕は近代的賃金労働者を見ている」のではあるが。

それはともかく、スミスのいう「初期未開の社会状態」にあっては、「労働の全生産物」は生産者あるいは労働者に属するものとされていた。「しかしながら」——とスミスはいう——「労働者が自分自身の労働の全生産物を享受するというこの事物の本源的な状態は、土地の占有や資財の蓄積が最初に導入されたあとまで続きうるものではなかった」(*The Wealth of Nations*, p. 67. 前掲訳書、一五八頁)。では、「事物の本源的な状態」が終りをつげたあとでは、どんな変化が起こるのであるか？ スミスはいう。——「事態がこのようになると(つまり、資本関係が「導入」されると)労働の全生産物は必ずしもつねに労働者に属さない。彼は、たいていの場合、彼を雇用する資財の所有者とそれを分割しなければならぬ。また、こうなると、ある商品の獲得または生産にふつう費やされる労働の量は、その商品がふつう購買し支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規制しうる唯一の事情ではない。賃金を前払いし、その労働の原料を提供した資財の利潤にたいしてもまた、当然、追加量が支払われなければならないのは明白である」(*Ibid.*, p. 61. 同上、一三四頁、—「引用C」)。

さきにも述べたように、「労働の全生産物」が生産者自身に属する「初期未開の社会状態」では、商品に投下された労働量と、その商品が支配し購買しうる労働量とは完全に一致するといつてよかつた。だからまた、そこでは事実上、一定量の生きた労働が同じ量の対象化された労働(あるいは、この労働を表わす商品)と交換されるという関係が見られた。しかし、こうした「事物の本源的な状態」が終つて資本関係が現われ、「彼〔労働者〕は、たいていの場合、彼を雇用する資財の所有者とそれ〔労働の生産物〕を分割しなければならぬ」ということにな

ると、事態に本質的な変化が生じてくる。すなわち、——マルクスの文章でいえば——いまや「労働の生産物またはこの生産物の価値は、労働者のものではない。一定量の生きた労働は、同じ量の対象化された労働を支配しない。いいかえれば、商品に対象化された一定量の労働は、その商品そのものに含まれているよりも大きな量の生きた労働を支配する」(Theorien, Teil I, MEW, Bd. 26, Teil I, S. 43. 『学説史』第一分冊、『全集』⑧一、五二頁)。

スマスが右の△引用C▽で強調しているのはこの点である。すなわち、資本家と労働者とのあいだの交換では、「対象化された一定量の労働」がより多くの量の生きた労働と交換されるという点である。そしてスマスが、資本関係の「導入」後に生ずるこうした変化を力説したことは、彼の大きな功績をなすものであった。というのは、彼はこの場合、資本主義的生産の基礎上では「対象化された一定量の労働」(つまり資本)が労働者のおこなう生きた労働の一部分を無償で取得する、つまり搾取する、という点を問題にしているのだからである。

しかしアダム・スマスは、「労働力」範疇を定立することなく、資本(対象化された労働)を生きた労働と直接に對置させたため、資本と賃労働とのあいだの交換の問題を正しく解決することができず、かえって、「文明社会(the civilized society)」＝資本主義社会における投下労働説の妥当性を否定してしまった。この点についてマルクスは次のようにいっている。——「たしかにアダムは、商品の価値をそれに含まれている労働時間によって規定しはするが、そのあとで、再びこの価値規定の現実性をアダム以前の時代へ追いもどしている。いいかえれば、彼にとって単純商品の立場では真実だと思われることが、単純商品に代わって資本・賃労働・地代・等々のいっそう高度で複雑な諸形態が現われてくるや否や、彼にははつきりしなくなるのである」(Zur Kritik der politischen Ökonomie, MEW, Bd. 13, S. 44. 『経済学批判』『全集』⑩(四四頁)。つまり、スマスには、労働時間による価値

規定の妥当性は価値が賃金や利潤などに「分割」されることによって止揚されない、という点が理解できなかったわけである。

ところでわれわれは、資本関係「導入」後の事態にかんするスミスの主張内容をもう少し掘り下げて考察するために、前掲△引用CⅤの文章をいま一度引用しておこう。——「事態がこのようになると（つまり、資本関係が「導入」されると）労働の全生産物は必ずしもつねに労働者に属さない。彼は、たいいの場合、彼を雇用する資財の所有者とそれを分割しなければならぬ。また、こうなると、ある商品の獲得または生産にふつう費やされる労働の量は、その商品がふつう購買し支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規制しうる唯一の事情ではない。賃金を前払いし、その労働の原料を提供した資財の利潤にたいしてもまた、当然、追加量が支払われなければならないのは明白である」。

ここでスミスのいう「ある商品の獲得または生産にふつう費やされる労働の量」とは、——これを字義どおりに読めば——「ある商品」自身に投下された労働量のことだといふべきであろう。しかし、投下労働量による価値規定と「労働の価値」による価値規定とをたえず混同するスミスは、この一句によって同時に、「ある商品」の生産に要した「労働の価値」すなわち賃金を意味させているのである。詳言すれば、この場合、スミスは一方では、「ある商品」自身に投下された労働の量を念頭に置きながら、同時に他方では、「ある商品の獲得または生産」のために「資財の所有者」資本家によって、「費やされる労働の量」、いかえれば「彼（労働者）を雇用する資財」（＝前貸可変資本）に対象化された労働の量、つまり賃金を表象に浮かべているわけである。そして、このような費用視点からスミスは、「ある商品」が「ふつう購買し支配し、またはこれと交換されるべき労働の量」

——これは「ある商品」の交換価値ないし価格のことだが——は資本主義社会にあっては、その商品の生産に要費した賃金よりも大きくなければならぬ、なぜなら「賃金を前払いし、その労働の原料を提供した資財の利潤にたいしてもまた、当然、追加量(an additional quantity)が支払われなければならない」から、という点を強調する。^(注)しかし、もともと「ある商品の獲得または生産にふつう費やされる労働の量」とは投下労働量のことであり、スミス自身も以前にはそのように考えて「こういう事態〔初期未開の社会状態〕のもとでは、労働の全生産物は労働者に属し、また、ある商品の獲得または生産にふつう費やされる労働の量は、その商品がふつう購買し支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規制しうる唯一の事情である」といつていたのだから、いまや彼が一転して、「こうなると〔資本関係が出現すると〕、ある商品の獲得または生産にふつう費やされる労働の量は、その商品がふつう購買し支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規制しうる唯一の事情ではない」と主張するときには、まさにそのことによって彼は、——マルクスが皮肉っていたように——「この〔労働時間による〕価値規定の現実性をアダム以前の時代へ追いもどしている」のである。

(注) この場合にはスミスは、商品の「価値」(じつは交換価値ないし価格の一部)を「労働の価値」あるいは賃金によって規定しており、こうして「価値」・イコール・賃金と表象しながら、商品の交換価値ないし価格は資本主義社会では「価値」(＝賃金)よりも——「追加量」つまり「資財の利潤」(および地代)分だけ——高いと考えているといつてよい。なお、初期のエンゲルス(『国民経済学批判大綱』)および初期のマルクス(『エンゲルスにかんするノート』)、「リカードウにかんするノート」などは、ともにスミスのこうした考えを支持したのであって、この間の事情については拙稿「初期エンゲルスの価値論および分配論について」(岡崎栄松・大島雄一編『資本論の研究』、日本評論社、二九—三二頁)を参照されたい。

要するに、△引用C▽においてはスミスは、一方では、資本関係の出現後に生ずる事態の変化を強調しながら、資本と賃労働との交換の問題を提起しているのだが、しかし同時に他方では、投下労働量による価値規定の妥当性が商品価値の賃金や利潤などへの分裂によっては止揚されないという点を理解できずに、資本主義社会での投下労働説の妥当性を否定しているわけである。

では、支配労働説については事情はどうであろうか？ これはスミスの場合、資本関係の「導入」以降もひきつづき妥当性を保持するものとされる。この点は彼が、「文明社会」＝資本主義社会での事態を問題にしなから、たとえば、「必需品の実質価格、つまり、それが購買または支配しうる労働量」(The Wealth of Nations, p. 191. 前掲訳書、三四九頁、傍点は引用者)とか、「金銀の実質価値、つまり、それらが購買または支配しうる労働の実際の量」(Ibid., p. 188. 同上、三四四頁、傍点は引用者)とかいっていることから知られるところであろう。すなわち、スミスは、資本主義社会では諸商品(貨幣商品も含めて)の「実質価値」＝「実質価格」は「それらが購買または支配しうる労働の実際の量」によって規定されると考えるわけである。そして彼は、「……それ自体の価値がたえず変動する商品もまた、他の諸商品の価値の正確な尺度にはなりえない」と信じているので、「文明社会」においても「労働の価値」だけはつねに不変であると強調しながら、次のようにいう。

「等量の労働は、たとえ労働者にとってはつねに等しい価値があるとしても、彼を雇用する人にとっては、あるときにはより大きな、またあるときにはより小さな価値があるように見える。彼は等量の労働を、あるときにはより多量の、またあるときにはより少量の財貨で購買するのであって、彼にとっては、労働の価格は他のすべての物のそれと同じように変動するように思われる。彼にとっては、前者の場合にはそれが高価で、後

者の場合にはそれが安価であるように見える。けれども前者の場合に安価で、後者の場合に高価なのは、じつは財貨なのである」(*Ibid.*, p. 35. 同上 一一〇頁、傍点は引用者)。

このようにスマスは、「彼〔労働者〕を雇用する人」が登場する資本主義社会にあっても、「労働の価値」だけは——他の諸商品の価値ないし価格がどのように変動しようとも——つねに不変のままであると主張する。だからまた、彼が以前に支配労働説の立場から提示した命題、すなわち「それ自体の価値においてけっして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されうるところの、究極かつ真の標準である」という命題は、もちろん、資本関係の「導入」以降もひきつづき妥当するものとされるわけである。^(注)

(注) 投下労働説の貫徹を目指すリカードウは、スマスのこのような主張にたいしては強く反対する。——「労働の価値も〔金銀の価値や穀物の価値と〕同じように可变的ではないか? というのは、それは、他のすべての物と同じく、社会状態のあらゆる変化とともに一樣に変動する供給と需要との割合によって影響されるばかりでなく、また、労働の賃金が支出される食物やその他の必需品の価格の変動によっても影響されるからである」(*Principles, The Works and Correspondence of D. Ricardo*, vol. I, p. 15. 『原理』『リカードウ全集』第一卷、一七頁)。「そうしてみる」と、アダム・スマスとともに、「労働は、ときにはより多量の財貨を、またときにはより少量の財貨を購買しうるであろうから、変動するのはそれらの財貨の価値なのであって、それらを購買する労働の価値ではない」、したがって『それ自身の価値において、けっして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されうるところの、究極かつ真の標準である』というのは、けっして正しくない」(*Ibid.*, pp. 16-17. 同上 一九頁、傍点はリカードウ、ゴシックは引用者)。

ここでのリカードウのスマス批判は、支配労働説の見地に立つスマスが、「労働の価値」のもとに「労働の時価」＝賃金を表象しているかぎりでは、当を得ているといつてよからう。しかし、上述したように、アダム・スマスは他

方では、「彼〔労働者〕は〔等量の労働〕をおこなうさいには」自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分を放棄しなければならない」との考えから「労働の価値」の不変性を説いたのであって、スミスのこのような所説は、もちろん資本関係の「導入」以後についても保持される。というよりも、マルクスが指摘していたように、前掲 引用Bでスミスが右のように説いたさいには、彼ははもとも「近代の賃金労働者」を脳裡に描いていたのであった。

しかし、リカードウはこうした事情には少しも気づいていない。そして、そのためと思われるが、彼は右の二番目の引用文ではスミスの所論をかなり強引に改変している。すなわち、当該箇所のスミスの原文は次のとおりである。

——“The price which he [the labourer] pays must always be the same, whatever may be the quantity of goods which he receives in return for it. Of these, indeed, it may sometimes purchase a greater and sometimes a smaller quantity; but it is their value which varies, not that of the labour which purchases them.”この文章をリカードウは次のように引用、批評する(イタリックはリカードウ「下線は引用者」)。“It cannot then be correct, to say with Adam Smith, ‘that as labour may sometimes purchase a greater, and sometimes a smaller quantity of goods, it is their value which varies, not that of the labour which purchases them;…….’”しかしスミスは、前掲の原文ではリカードウの引用でのように、「労働は、ときにはより多量の財貨を、またときにはより少量の財貨を購入しうるであろうから、変動するのはそれらの財貨の価値なのであって、それらを購入する労働の価値ではない」(傍点はリカードウ、ゴシックは引用者)とはいっていない。スミス自身は、「実際のところ、それ〔すなわち労働者〕が「支払う価格」、つまり労働者が労働にさいして払う犠牲」が購買するこれらの財貨は、あるときはより多量であろうし、またあるときはより少量であるが、しかし、変動するのはこれらの財貨の価値なのであって、それらを購入する労働の価値ではない」(傍点は引用者)といっているのである。そして、スミスのこうした立論を基礎づけているのは、「彼〔労働者〕は〔等量の労働〕をおこなうさいには」自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならない」から「等量の労働は、いっどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値がある」(引用B)、「という彼のいわは所信である。もちろん、以前にも述べたように、この場合、スミスは、労働は価値を形成する実体ではあるが価値をもたないという点を把握

アダム・スミスの自然価格論について(上)(岡崎)

できないままに、あたかも、生きた労働そのものが価値をもつかのように考えているのであるが、しかし、それにして、上掲の文章におけるリカードウの引用の仕方が相当に強引であり、また、そこでの彼のスミス批判が一面的なものにとどまっていることは、右の検討からして明らかであろう。

なおマルクスは、『資本論』第一巻（第六篇「労賃」）のなかで、アダム・スミスが「文明社会」資本主義社会の場合についても「労働の価値」の不変性を主張するのはなぜかを問題にしながら、次のように述べている。

「たとえは十二時間の労働にたいして六時間の労働の価値生産物、たとえば三シリングを受けとる労働者の立場に立って見れば、彼にとっては実際には彼の十二時間の労働が三シリングの購買手段である。彼の労働力の価値は彼の慣習的な生活手段の価値の変動につれて三シリングから四シリングに、または三シリングから二シリングに変わるかも知れないし、また、彼の労働力の価値は変わらなくても、その価格は需要供給関係の変動によって四シリングに上がったたり二シリングに下がったりするかも知れないが、彼が与えるのはつねに十二時間労働である。だから、彼の受けとる等価の大きさが変わるごとに、その変動は彼にとっては必然的に彼の十二労働時間の価値または価格の変動として現われるのである。この事情は、労働日を一つの不変量として取り扱うアダム・スミスを惑わして、逆に、次のような主張をさせることになった。すなわち、生活手段の価値が変動したために同じ労働日が労働者にとってより多くの貨幣に表わされたり、より少ない貨幣に表わされたりしても、労働の価値は不変である、というのである」(Das Kapital, Bd. I, MEW, Bd. 23, S. 563. 『資本論』第一巻、『全集』③a, 七〇一―七〇二頁)。

約言すれば、アダム・スミスは、「文明社会」においても支配労働量は商品価値の規制者または内在的尺度であると同時に、「それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されるところの、究極かつ真の標準」だと主張するわけである。そして、この場合にはスミスが、商品の「価値」（じつは交換価値ないし価格の一部分）を「労働の価値」＝賃金によって規定していること、また彼が内在的価値尺度と外在的価値尺度とを混同して、「それ自体の価値においてけっして変動しない」ものだけが外在的価値尺度になりうると誤認していることは、すでに述べておいたところである。

三 分解価値説と構成価値説

前節ではわれわれは、A・スミスの「自然価格」概念を立ち入って考察するための、いわば理論的準備作業の意味合いで、彼の価値論をやや詳しく検討してきた。そこで、こんどはわれわれは、スミス分配論——分解価値説と構成価値説——の内容を見てゆくことにしよう。

さて、アダム・スミスは、「文明社会」Ⅱ資本主義社会の到来とともに投下労働説は妥当しなくなると主張したのであったが、しかし、それにもかかわらず彼は、実際上は資本関係の出現後の事態についても投下労働説を保持しながら、みずからの分解価値説を展開するのである。

たとえば、『国富論』第一篇第八章「労働の賃金について」の冒頭部分でスミスは、「土地の占有や資財の蓄積が最初に導入されたあと」では事態がどうなるかを考察しつつ、次のようにいつている。

「土地が私有財産になるや否や、地主は、労働者がその土地から産出したり収集したりするほとんどいっさいの生産物について分け前(share)を要求する。彼の地代は、土地に使用される労働の生産物からの第一の控除をなすのである。

「土地を耕やす人が、その収穫を刈り入れるときまで、自分自身を扶養する資力をもちあわせていることはめったにない。彼の生活維持費は、一般に親方、つまり彼を雇用する農業者の資財から彼に前払いされるのであって、この親方は、土地を耕やす人の労働の生産物の分け前にあずからぬかぎり、すなわち、自分の資財が

利潤とともに回収されぬかぎり、彼を雇用するのになんの関心もたないであろう。この利潤が、土地に使用される労働の生産物からの第二の控除をなすのである。

「ほとんどすべての他の労働の生産物もまた、同じような利潤の控除をまぬかれぬ。あらゆる工芸と製造業においては、大部分の職人は、彼らの仕事のための原料と、その仕事が完成されるまでのあいだの賃金と生活維持費とを前払いしてくれる親方を必要とする。この親方は、職人たちの労働の生産物の、いいかえれば彼らの労働が原料に投ぜられた結果としてその労働が原料に付加するところの価値の分け前にあずかるのであって、この分け前こそが彼の利潤なのである。」（*The Wealth of Nations*, p. 67. 前掲訳書、一五九頁、傍点は引用者——〈引用D〉）。

この〈引用D〉の第一・第二のパラグラフでスミスが資本家的農業生産を取り扱う場合、一見したところでは、彼は生産物そのものの分配を問題にしているかのようにである。しかし、そうではなく、彼はここでも無意識のうちに投下労働説を固持しながら、「労働の生産物」の価値の「分け前」を問題にしているのであって、この点は、すぐあとにつづく第三のパラグラフにおける主張内容を見れば明らかであろう。というのは、そこでは彼は、「労働の生産物」と、「労働が原料に投ぜられた結果としてその労働が原料に付加するところの価値」、つまり付加価値とを同じものと見なしており、かつ、この付加価値の「分け前」こそが利潤だとして、この点を大いに力説しているからである。したがって、右の〈引用D〉でスミスが展開しているのは次の二つの点である。——

(i) かの「事物の本源的な状態」が終焉して「土地の占有や資財の蓄積」が「導入」されると、地主および「親方」＝借地農業者が、「土地に使用される労働の生産物」についてそれぞれの「分け前」を要求するので、労働

者はいまや付加価値の全部を取得することができなくなる、そして地代は付加価値からの「第一の控除」であり、利潤は同じ付加価値からの「第二の控除」である。(ii)「ほとんどすべての他の労働の生産物もまた、同じような利潤の控除をまぬかれない」、だから「あらゆる工芸と製造業」では、「職人」⇨労働者の「労働が原料に付加するところの価値」は賃金および利潤という二つの部分に分解せざるをえない。^(注)

(注) この(ii)の点にかんしては、スマイスは第六章「諸商品の価格の構成部分について」のなかで、こうもいっている。

「資財が個々人の手に蓄積されるや否や、彼らのなかのある者は、勤勉な人々を就業させるために当然それを使用し、彼らの所産を売ることによって、すなわち彼らの労働が原料の価値に付加するものによって、利潤を得るために、彼らに原料や生活資料を供給しようとする。その完成品を貨幣、労働またはその他の財貨のいずれかと交換する場合には、こういう冒険に自分の資財をあえて投ずるこの事業家にも、その利潤として、原料の価格や職人の賃金を支払うに足りるものを越える何ものかが与えられなければならない。それゆえ、職人たちが原料に付加する価値は、この場合、二つの部分に分解するのであって、その一つは彼らの賃金を支払い、他は雇い主が前払いした原料と賃金との全資財にたいする利潤を支払うのである」(Ibid., p. 50. 同上、一三二頁、傍点は引用者)。

見られるとおり、ここではスマイスは、「雇い主」の利潤が、資本のうち生産手段(ただしスマイスにあっては労働手段が見逃されていて原料だけであるが)に前貸しされた部分からは発生しえないこと、いいかえれば、利潤は「職人たち」の労働が原料に付加する価値の分解部分にはかならないことを正しく強調している。マルクスはこの点を高く評価して、「彼」[スマイス]は剰余価値の真の源泉を認識した」といっている(Vgl. *Theorien*, Teil I, MEW, Bd. 26, Teil I, SS. 49-51. 『学説史』第一分冊『全集』②一、六〇—六三頁参照)。

こうしてアダム・スマイスは、賃金、利潤および地代をいずれも付加価値の分解部分として把握しながら、利潤と地代はともに付加価値からの「控除(deduction)」であり、それにたいする資本家および地主の「分け前」だとするわけである。だが、これはとりもなおさず、スマイスが利潤と地代との双方を付加価値の不払部分つまり剰余

価値の一分肢と解していたことを意味するものにほかならない。^(注)したがって、スミスが——意識的ではないが、いわば本能的に投下労働説を固持しつつ——その分解価値説を展開する場合には、彼は「深遠な考察方法」のもとに、「ブルジョア経済体制の隠れた構造」あるいは「ブルジョアの体制の内的関連」を探究しているといふことができる。

(注) マルクスは、前掲の△引用D▽について次のように述べている。——「ここではA・スミスは、卒直な言葉で、地代および資本の利潤が労働者の生産物からの、あるいは労働者によって原料につけ加えられた労働量に等しい彼の生産物の価値からの控除にすぎないことを示している。ところが、この控除は、……労働者の賃金を支払うだけの労働量、すなわち賃金にたいする等価をもたすだけの労働量を越えて、労働者が原料につけ加える労働部分からのみ成り立ちうるものであり、したがって彼の労働の不払部分たる剰余労働からのみ成り立ちうるものである」(Ehenda, S. 56. 同上、七〇頁、傍点はマルクス)。

なおまたマルクスは、スミスが利潤および地代をとくに付加価値からの「控除」だとしたことの意義と限度とを指摘しながら、次のように書いている。

「A・スミスは、剰余価値、すなわち、遂行された労働でしかも商品に実現されている労働のうち、支払われた労働を越える——その等価を賃金で受けとった労働を越える——超過分たる剰余労働を、本来的な利潤や地代はその枝条にすぎないところの一般的範疇として理解する。それにもかかわらず、彼は、剰余価値そのものを独自の範疇として、それが利潤や地代として受けとるところの特殊な諸形態からは区別しなかつた。このことから、彼においては、リカードウにあってはなおさらそうであるが、研究上に多くの誤りと欠陥が生じている」(Ehenda, S. 53. 同上、六頁、傍点はマルクス)。

ところで、アダム・スミスは第六章「諸商品の価格の構成部分について」のなかで、「どのような社会でも、あらゆる商品の価格は結局、これらの三部分(賃金、利潤および地代)のいずれか一つに、またはそのすべてに分解

される」(*The Wealth of Nations*, p. 52. 前掲訳書「一三六頁」といふ) さらに「同じ章のなかで、こうも述べている。——「ある商品の全価格は結局のところ、これらの三部分(賃金・利潤・地代)のどれか一つに、またはそのすべてに分解されなければならないのであって、それというのも、土地の地代と、その商品を産出し製造し、またそれを市場へもたらすのに雇用された全労働の価格とを支払ってなおそのあとにどのような部分が残りろうともそれは、必然的にだれかの利潤でなければならぬからである」(*Ibid.*, p. 54. 同上「一三八頁」と)。

スミスがこのように主張する場合、彼が生産物価値($c + v + m$)と価値生産物($v + m$)とを混同していて、いわゆる「 $v + m$ のドグマ」に陥っていることは明らかであろう。

しかしA・スミスは、商品の価値は賃金、利潤および地代という諸収入だけに分解されるとするこの「 $v + m$ のドグマ」を、第六章の他の箇所では自分自身で止揚するのであって、事実、彼は次のようにいつている。

「たとえば、穀物価格においては、一部分は地主の地代を支払い、別の部分はその生産に雇用された労働者や牲畜の賃金または維持費を支払い、さらに第三の部分は農業者の利潤を支払う。これらの三分は、直接的にか究極的にかのいずれにせよ、全穀物価格を形づくっているように思われる。第四の部分が、農業者の資財を回収するために、また、その牲畜その他の営農用具の消耗を補償するために必要だと考える人がおそらくあるであろう。けれども、たとえば役馬のような、ある営農用具の価格は、それ自体が同じ三部分から、すなわち、それが飼育されている土地の地代と、それを世話したり飼育したりする労働と、さらに、この土地の地代およびこの労働の賃金の双方を前払いする農業者の利潤との三分から形づくられる、ということが考慮されなければならない。それゆえ、たとえば穀物価格は、馬の維持費はもとより、その価格をも支払うであろうが、

なおその全価格は、直接的にか究極的にかのいづれにせよ、地代、労働(賃金)および利潤という同じ三部分に分解されるのである」(Ibid., p. 52. 同上、一三六頁、傍点は引用者)。

ここでスマスが労働者と役畜とを同列に置いて、後者の維持費を一種の賃金と見なしていることは度外視するとして、右の一文における彼の主張の要点を示せば、およそ次のごとくであろう。——個々の借地農業者の手中では「穀物価格」は賃金、利潤、地代および、「第四の部分(a fourth part)」に分解するといつてよい、しかし、個々の農業者にとって「第四の部分」をなすもの——たとえば「ある営農用具の価格」——は、それ自身、この「営農用具」を提供した他の資本家のもとで「同じ三部分」すなわち賃金・利潤・地代に分解する、したがって社会的見地からすれば、穀物の「全価格」は「直接的にか究極的にかのいづれにせよ」、賃金・利潤・地代という「同じ三部分」に分解することになる、と。^(注1) こうしてスマスは、われわれの注意を一つの生産部面から他の生産部面へと向けさせることによって、商品価値は結局のところ、賃金、利潤および地代に分解せざるをえないと説くのである。しかし、そのさい彼が、個々の借地農業者の「穀物価格」については「役畜その他の営農用具の消耗を補償する」「第四の部分」の存在を認めて「穀物価格は、馬の維持費はもとより、その価格をも支払うであろう」としているかぎりでは、彼が個別的資本の生産物にかんして「*Utm*のドグマ」を自分自身で否定していることは明らかであろう。^(注2)

(注1) マルクスは、スマスのこうした主張の難点を剔抉して次のようにいつている。

「しかし、次のことを考慮すべきことも、同じように自明のことではなかったか？ すなわち、借地農業者が馬や鋤の価格を小麦の価格に入れるのと同じように、借地農業者に馬や鋤を売った馬飼育者や鋤製造人もまた、生産用具(馬飼育者の場合にはおそらく別の馬)、および飼料や鉄のような原料の価格を、馬や鋤の価格に入れるということ、

また他方、馬飼育者と鋤製造人が賃金と利潤(と地代)を支払うための財源は、彼らが、自分たちの生産部面において、彼らの不変資本の現存価値額につけ加える、新しい労働のうちにもみ存するということである。したがって、A・スミスが借地農業者について、彼の穀物の価格のうちには、彼が自分と他人とに支払った賃金と利潤と地代とのほかに、なお第四の、そしてそれらとは違った成分、すなわち馬や農具などのような彼によって消費された不変資本の価値がはいっているのを認めるとすれば、そのことは、しかしまた馬飼育者や農器具の製造業者についても当てはまるのであって、スミスがわれわれを次から次へと引き回すことは、なんの役にもたない。それにしても、借地農業者の例を選んだことは、われわれを次から次へと引き回すためには、とりわけ都合が悪い。なぜなら、この場合には不変資本の項目中に、まったく他のだれからも買わないもの、すなわち種子が見いだされるからであって、この価値成分はいったいだれにとって、賃金、利潤または地代に分解されるのか?」(Theorien, Teil I, MEW, Bd. 26, Teil I, S. 70. 『学説史』第一分冊、『全集』②⑥、八九九〇頁、傍点はマルクス)

(注2) アダム・スミスが第十一章「地代について」の末尾で次のように述べるときには、彼は労働時間による価値規定を固持しながら、商品価値における一部分の存在をはっきりと認めているといつてよからう(もっとも、ここでは彼は労働手段の価値移転の問題を等閑に付しているが)。「……原料の実質価格の必然的な上昇が、作業上の改善によつてもたらされるいっさいの利益を相殺して余りあるような少数の製造業もあるであろう。大工や指物師の仕事、ならびに粗雑な部類のたんす製造業では、土地改良の結果としての、果実を生まぬ用材の実質価格の必然的な上昇は、最良の機械、最大の技巧、さらには最適な作業の分割ならびに配分から引き出されるいっさいの利益を相殺して余りあるであろう。しかしながら、原料の実質価格が全然上昇しないか、または、たとえ上昇してもそう甚だしくないか、そのいずれかであるすべての場合には、製造品の実質価格はきわめて甚だしく下がるのである」(The Wealth of Nations, p. 242. 前掲訳書「四二四—四二五頁、傍点は引用者」)

前節で見たように、支配労働説の立場に立つスミスは、商品の「実質価格」を支配労働量、すなわちその商品が「購買または支配しうる労働の実際の量」によつて規定するが、しかし右の一文では、彼は投下労働説の見地に立つていて、投下労働量(原料)に対象化されている過去の労働を含む)によつて規定される価値の貨幣的表現をもつて「実質価格」だとしている。そして、ここで彼が主張しているのは次の点である。すなわち、「製造品の実質価格

「 $(\parallel \wedge c + v + m \vee)$ 」は、たとえ労働の生産性の上昇によって新価値部分（ $(\parallel \wedge v + m \vee)$ ）が減少したとしても、「原料の実質価格」つまりc部分の「必然的な上昇」の結果、それに相殺されて低下しない場合がある、しかし、「原料の実質価格が全然上昇しないか、または、たとえ上昇してもそう甚だしくない」場合には、「製造品の実質価格」は労働の生産性の上昇によって「きわめて甚だしく下がる」ことになる、という点がそれである。

しかし、アダム・スミスにあっては、このように商品価値におけるc部分の存在を認めるのは、どちらかといえば特殊なケースであって、「ある商品の全価格」は結局のところ賃金、利潤および地代に分解せざるをえないとする考えのほうが優勢である。

なお、このあとの見地に立つスミスは、個々の商品についていえることが社会の年々の商品総体について妥当しいはずはなく、だからこの商品総体の価値もまた賃金、利潤および地代に分解するとして、社会的総生産物の価値にかんしても「 $v + m$ のドグマ」に陥ることになる。ただし、ここでも彼は、自説において前後撞着しながらも、こうしたドグマを自分自身で止揚するのだが。ちなみに、この間の事情については、さしあたり拙著『資本論研究序説』四八―五三頁を参照されたい。

さて、以上、われわれはA・スミスの分解価値説の内容を概観してきたが、ひきつづいてわれわれは彼の構成価値説を問題にすることにしよう。

ところでマルクスは、『資本論』第三卷（第七篇「諸収入とそれらの源泉」）のなかで、「資本——利潤（または利子）、土地——地代、労働——賃金」という「三位一体的定式（die trinitarische Formel）」について論じながら、次のように述べている。やや長文にわたるが重要なので、当該箇所をほぼ全文、引用しておこう。——「年々生産される総価値のうちこの三つの価値部分（利潤、地代および賃金）は、またそれらに対応するところの、年々生産される総生産物中の三つの部分は、——ここではさしあたり蓄積を無視する——それぞれの所有者（すなわち資本家、土地所有者および労働者）によって、年々、その再生産の源泉が枯渇することなしに、消費される。この三つの部

分は、一本の多年生の木の、またはむしろ三本の木の、年々消費してよい果実として現われる。それらは、資本家と土地所有者と労働者という三つの階級の年々の収入、すなわち、剰余労働の直接的没出者であり労働一般の直接的充用者である機能資本家によって分配される収入をなしている。……〔しかし〕分配はむしろこの実体、つまり、年々の社会的総〔価値生産物〕を現存するものとして前提している。すなわち、対象化された社会的労働にほかならない年間生産物の総価値を前提している。ところが、このことは、生産当事者たちにとっては、すなわち生産過程のいろいろな機能の担い手たちにとっては、このような形で現われるのではなく、むしろこれとは逆の形で現われるのである。……資本と土地所有と労働とは、かの生産当事者たちにとっては、三つの違った独立な源泉として現われ、このようなものとしてのこれらの源泉から、年々生産される価値の——だからまた、この価値がそのなかに存在する生産物の——三つの違った成分が発生するのであり、したがってこの三つの源泉からは、この価値のいろいろな形態が社会的生産過程の別々の代理人の手にはいる収入として出てくるだけではなく、この価値そのものが、だからまたこれらの収入形態の実体が発生するのである」(Das Kapital, Bd. III, MEW, Bd. 25, SS. 829-831. 『資本論』第三卷、『全集』②9、一〇五三—一〇五四頁、傍点は引用者)。

すなわち、実際には諸階級の収入(利潤・地代・賃金)は分配されるべき「実体(Substanz)」つまり「対象化された社会的労働にほかならない年間生産物の総価値」の存在を前提しているのだが、それが生産当事者たちにとっては——したがって、彼らの通俗的表象の定式化である「三位一体的定式」においても——「逆の形で現われる」ことになる。いいかえれば、彼らにあっては、資本、土地所有および賃労働が次のような意味での収入源泉、すなわち「年々生産される総価値」のうち第一の部分が利潤の形態に、第二の部分が地代の形態に、また第三の

部分が賃金の形態に転形するのを媒介する、という意味での収入源泉から、これらの収入形態の「実体」つまり価値そのものを生み出す「三つの違った独立な源泉（drei verschiedene, unabhängige Quellen）」へと転化させられるわけである。だが、この場合には、収入源泉としての資本、近代的土地所有および賃労働——これらはいずれも一定の歴史的に規定された社会構造に属する——が、生産過程一般の素材的要因である生産手段・土地・労働に解消されたいうえで、この労働・生産手段・土地が生産過程で演ずる役割（いわゆる「役立ち」ないし使用価値）から賃金・利潤・地代が発生し、かつ、これらの収入が価値あるいは交換価値を構成する、というふうに表象されているのである。

そしてアダム・スミスが、(i)商品の「価値」（じつは交換価値ないし価格の一部分）を支配労働量あるいは「労働の価値」によって規定し、こうして「労働の価値」＝賃金を商品の価格における第一の構成要素たらしめるとともに、(ii)「諸商品の価格においては資財の利潤は、労働の賃金とはまったく異なる構成部分をなし、まったく異なる諸原理によって規制されている」（*The Wealth of Nations*, p. 51. 前掲訳書、一三三頁、傍点は引用者、——〈引用E〉と主張し、また(ii)「この部分（労働者の「労働が収集ないし生産したものの一部」）が、あるいはこれと同じこととなるが、この部分の価格が土地の地代を構成し、そしてそれは大部分の商品の価格における第三の構成部分を形づくる」（*Ibid.*, p. 51. 同上、一三四頁、傍点は引用者、——〈引用F〉と語る場合には、彼スミスは、まさに右のように表象しつつ、みずからの構成価値説を唱えているのである。^(註)さらにまたスミスが、「賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉（the three original sources of all exchangeable value）であると同時に、いっさいの収入の三つの本源的な源泉である」（*Ibid.*, p. 54. 同上、一三九頁、傍点は引用者、——〈引

用G」と主張する場合も同様だといってきしつかえない。

(注) なお、本文で示した△引用Eの文章は『国富論』初版(一七七六年)では、「諸商品の価格においては資財の利潤は、労働の賃金とはまったく異なる価値の「源泉(a source of value)であり」云々(Bicentenary facsimile edn. of 1st edn. of *The Wealth of Nations*, Yushodo Booksellers Ltd., Tokyo, 1976, p. 59. 傍点は引用者)となつている。また、△引用Fの文章は初版では、「大部分の商品の価格においては土地の地代は、……価値の第三の源泉(a third source of value)をなすようになる」(*Ibid.*, p. 60. 傍点は引用者)と書かれている。

もっとも、右の△引用Gにおいてスミスが、「賃金、利潤および地代は、……いっさいの収入の三つの本源的な源泉である」といつているのは、べつに間違いではない。なぜなら、これは賃金、利潤および地代を付加価値の分解部分として擷んだうえでの立言だからである。しかし彼が、同じ△引用Gの前半部分で「賃金、利潤

および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉である」と述べる場合には、彼は、あらゆる労働はその本性上、自然的に賃労働だと見なしながら、一定の歴史的に規定された生産要因(資本・賃労働・近代的土地所有)をすべての社会に共通な質料的生産要因(生産手段・労働・土地)に解消し、こうして「三位一体的定式」すなわち自然形態における生産諸要因を近代的諸収入の「実体」たる価値そのものの「三つの違った独立な源泉」だとする通俗的な見解を定式化しているのである。いいかえれば、△引用Gの前半部分では、「三位一体的定式」とスミス構成価値説の基本命題とが、いわば模範的に示されているわけである。

(注1) いま、この点を示すために、右の△引用Gが含まれているパラグラフ全体の文章を掲げておけば、次のとおりである。

「あらゆる特定商品の価格つまり交換価値が、これを個々別々にとつて見れば、これらの三部分「賃金、利潤および地代」のどれか一つに、またはそのすべてに分解されるように、あらゆる国の労働の年々の全生産物を構成するい

っさいの商品の価格もまた、これを複合的に見れば、同じ三部分に分解され、その国のさまざまな住民の労働の賃金彼らの資財の利潤、または彼らの土地の地代のいづれかとして、彼らのあいだに分配されるにちがいない。あらゆる社会の労働によって年々に採集または生産されるものの全体、またはこれと同じことになるが、その全価格は、こういう仕方、そのさまざまな成員のあるもののあいだに本源的に分配される。賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉であると同時に、いっさいの収入の三つの本源的な源泉である。他のいっさいの収入は、究極的には、これらのなかのどれかから引き出されるものである」(The Wealth of Nations, p. 54. 前掲訳書、一三九頁、傍点は引用者)。

見られるように、ここでスミスは例の「*r + m* のドグマ」を社会的総生産物の価値について定式化しているのだが、右の一文のうち、「賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉である」という章句を除いた箇所では、彼は投下労働説に基づいて分解価値説を展開しているといつてよい(もっとも、彼が「労働の賃金」、「資財の利潤」、「土地の地代」といった表現の仕方をするときには、多かれ少なかれ「三位一体的定式」の表象が混入してきているのだが)。だから、——付言しておけば——右の一文ではスミスはその分解価値説と構成価値説とを入り乱れさせ、それらを文字どおり交錯的に論述しているわけである。

(注2) アダム・スミスは、たとえば「有効需要」の規定にさいして「地代、労働および利潤の全価値をよるこんで支払う人々の需要」と述べ、賃金というべきところを「労働」といつていたが、彼がこのように賃金と労働そのものを無造作に同一視する場合にも、彼は賃労働からその歴史的形態規定をとり去ったうえで、たんなる素材的生産要因としての労働が生産過程で果たす「役立ち」|| 使用価値から賃金が発生するものと考えているのである。したがって、スミスが右の引用文以外でも——そして彼が分解価値説を展開しているところでも——「地代、賃金および利潤」と書く代りに、しばしば「地代、労働および利潤」と書いているのは、必ずしも偶然ではないのであって、これは価値論および分配論におけるスミスの二重性——とくに彼が支配労働説および構成価値説を唱えたこと——に起因しているといふべきであらう。

ちなみに、『国富論』キャナン版の「(編者) 脚注」の一つで E・キャナンは、スミスの「地代、労働および利潤」という書き方に言及しているが、しかし、そのさいキャナンは上記の事情には少しも気づいていないようである(Cf.

ibid., p. 52. 同上(一三六頁参照)。

右のような次第で、マルクスは、『剰余価値学説史』(第一分冊)のなかでスミス構成価値説を取り扱うにさいしては、批判の鋒先をなかならずく上掲△引用G▽の文章に向けて次のように論難したのであった。——「賃金、利潤および地代が『いっさいの収入の三つの本源的な源泉である』というのは正しいが、それらが、同じように『いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉でもある』というのは、間違っている。なぜなら、一商品の価値は、もっぱらそれに含まれている労働時間によって規定されているからである。さらにA・スミスは地代と利潤をたつたいま、たんなる控除すなわち労働者が原料につけ加える価値または労働からの控除として説いたばかりなのに、どうして彼は、それらを『交換価値の本源的な源泉』と呼ぶことができるのか? (それらは(というよりもむしろ土地所有と資本は)ただ、『本源的な源泉』を運動させる、すなわち労働者を強制して剰余労働を遂行させるという意味においてのみ、そうでありうるにすぎない。)それらは、価値の一部分すなわち商品に対象化されている労働の一部分を取得するための権利名義(条件)であるかぎりでは、その所有者にとっての収入源泉である。だが、価値の分配または取得は、けっして取得される価値の源泉ではない。……/土地所有と資本は、それらがその所有者にとっての収入源泉をなすということによって、すなわち彼らに、労働によってつくりだされた価値の一部分を取得する力を与えるということによって、そのことから、彼らの取得する価値の源泉となるということはない。だが、同様に、労賃が『交換価値の本源的な源泉』を形成すると述べることも、間違いである。といつても労賃は、というよりもむしろ労働能力の不断の販売は、労働者にとっての収入源泉をなすのではあるが。価値をつくりだすのは労働であつて、労働者の労賃ではない。労賃というのは、既存の価値にすぎないか、または、生産の全体を

見れば、労働者によってつくりだされた価値のうち、彼自身によって取得される部分にすぎないものである。だが、この取得が価値をつくりだすのではない」(Theorien, Teil I, MEW, Bd. 26, Teil I, S. 65. 『学説史』第一分冊、『全集』② Ⅰ、八二—八三頁、傍点はマルクス、ゴシックは引用者)。

マルクスのこの文章は、スマス構成価値説へのいわば殲滅的批判をなすものといえることができよう。

要するに、アダム・スマスが、商品の「価値」を支配労働量または「労働の価値」⇨賃金によって規定しながら、「賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉である」と主張する場合には、彼は、「価値をつくりだすのは労働であって、労働者の労賃ではない」という点、また、「価値の分配または取得は、けっして取得される価値の源泉ではない」という点を理解できずに(といっても、スマスが分解価値説を展開したさいには、彼は事実上、この点を把握していたのだが)、賃労働、資本および土地所有を、「商品に対象化されている労働の一部分を取得するための権利名義(条件)」という意味での収入源泉から、「取得される価値」そのものの「三つの違った独立な源泉」に転化させているわけである。別言すれば、支配労働説の見地に立つスマスがその構成価値説を唱えるときには、彼は、「通俗的な考察方法」のもとに、あらゆる社会で共通的に必要な質料的生産諸要因——労働・生産手段・土地——が生産過程において果たす機能(⇨「役立ち」)から賃金、利潤および地代が発生するというふうに表象しつつ、事態を、それがブルジョア的生産当事者たちにとって現われるとおりに記述しているのである。